きざき

太田市立木崎中学校
学校だより　第４号
発行責任者　　後閑　広之

修学旅行（大阪･京都）に行ってきました！

ＵＳＪ

６月６日（火）から２泊３日で、修学旅行が行われました。今年度は、木崎中初の「大阪・京都」方面の旅です。日本有数のテーマパークであるＵＳＪと日本の伝統文化を象徴する京都を堪能する旅行です。初日、木崎中を元気に出発した３年生は、熊谷駅から新幹線を乗り継いで新大阪駅に到着後、在来線を乗り継いで（乗り換え２回）ユニバーサル駅に到着しました。

清水寺

駅から入り口まで歩いていると小雨が降ってきました。天気予報でも雨マークが付いていたので覚悟はしていましたが、そのおかげで入場者数は普段の半分くらい（添乗員さんの感想）でした。入場門を入ると生徒達は、目当てのアトラクションめがけて一目散に散っていきました。空いていたので６つも７つも回れた生徒もいました。夕方になるとＵＳＪ場内外の飲食店でグループごとに夕食を摂っている風景を見ました。お土産屋さんでたくさんのグッズを買って、バスに乗り込む生徒が多かったです。大阪からバスに乗りいざ京都へ。ホテルに着くと班長会議の後、入浴・就寝。１日目からかなりの行動量でした。

２日目はホテルのおいしい朝食から始まり、京都の班別行動です。各班毎に練られた計画に従って、名所旧跡を訪ね歩きました。中学生にはやはり清水寺・二条城・金閣寺・伏見稲荷などが人気です。たくさんのスナップ写真とともに心のアルバムに思い出が刻まれたことでしょう。

金閣寺

３日目は、クラス別の名所巡りでした。私はＡ組に入れてもらい龍安寺と金閣寺を見て、京都駅に戻りました。各クラスが駅前広場に集合し、最後のお土産タイムを経て、新幹線に乗り込みました。大きな怪我や病気もなく、元気に木崎に帰ってくることができました。３年生にとって、生涯忘れられない貴重な体験となりました。

威風堂々、少年の主張太田市大会に参加！見事「優秀賞」

少年の主張太田市大会が６月２４日に行われました。木崎中を代表して３年Ａ組の新井美愛さんが参加しました。大変立派な主張で「優秀賞」をいただきました。新井さんは太田市の代表として、８月に行われる東毛地区大会に進みます。その内容を紹介します。

誰もが輝ける社会に

みなさんは、「差別」という言葉を聞くとどんなことを思い浮かべますか。私は、「差別」という言葉になんとなく嫌悪感を抱いていました。それは、親や先生から「差別はいけないこと」と聞かされてきたからです。しかし、ある人の存在が私の考え方を大きく変えてくれました。

去年の夏、私はソフトテニス部の部長になりました。部長になると、楽しいことばかりではありませんでした。部員は皆個性豊かで、自分の思いを持っています。自分の考えで練習に取り組んだり、私が何かを言っても聞いてくれなかったりと、みんなを一つにまとめるのはとても大変でした。それとともに自分の練習もうまくいかなくなり、思ったようにプレイすることができなくなってしまいました。私は自信を無くし、テニスに意欲的に取り組むことができなくなってしまったのです。そんな私を変えたのは、ある中学生との出会いです。その子は、他の学校で私と同じようにテニスを頑張っている子です。

私がその子に会ったのは、１年くらい前のことです。初めてその子にあったとき、私はとても驚きました。左手がなかったのです。「かわいそう」私がその子にはじめて持った思いです。

私は、テニスは、片手ではできないと思っていました。テニスは利き手にラケットを持ちますが、反対の手でボールを持ったり、体のバランスをとるのに腕を使ったり、手を使ってボールと自分の体の距離をはかったりと、反対の手にも大切な役割があります。「片手が無い状態で、どのくらいテニスができるのだろう。」「きっと力が入りづらいのだろうな。」「片手だけではいろいろと困るだろうな。」そんなふうに思っていました。

私は、なんとなくその子のことが気になり、その子のプレイを意識して見るようになりました。すると、その子は他の人と同じようにプレイしていたのです。とても力強いサーブをし、ボールを追いかけて上手にレシーブをしていました。その後も何度もその子に会う機会がありましたが、会うたびにテニスが上達しているのです。そして、その子はいつも笑顔を絶やさず、周りにも沢山の友達がいます。「ハンディキャップ」をもっていることを、見ている人に忘れさせてしまうくらいです。

それまでは単に「差別」はしてはいけないことだと考えていました。でも、そうではなく「差別」なんて、あんなに輝いている子に対して、できないと強く思いました。また、「かわいそう」と思っていた自分に対して腹が立ちました。「かわいそう」という言葉自体が、精一杯生きているその子を差別していたのだと気づきました。「かわいそう」という言葉は、自分よりも下に見ている人に対して使う言葉で、このように輝いている子に使うのは、絶対に許されない言葉だと思いました。この気づきが私を大きく変えてくれました。

その子のことを意識するようになってから、テニスへの向き合い方も変わりました。「ハンディキャップ」を抱えている子でさえ、あんなに頑張って上達しているのだから、私も負けていられないと思ったのです。また、様々な個性をもった部員をまとめることが難しいと思っていましたが、いろいろな子がいるのは当たり前です。それぞれが自分らしく輝けるような部活にしていきたい。そんなふうに思えるようになりました。部活だけでなく、学校のクラスや社会でも同じです。どんな人でも、一人一人が自分に合った生き方を見つけ、楽しく自分らしく輝けるようになるといいと思いました。私たちは、障害のある無しにかかわらず、相手が誰であっても、困っていたらお互い様という考えをもつことが大切です。相手のことを知ろうとする努力を重ねることで、誰もが輝ける社会が創れるはずです。私を含め、皆さんがこのようにすることで、そんな素晴らしい未来が来ることを信じて。